

古文書から見る西楽寺史

西楽寺

住職、江戸城へ行く

西楽寺と江戸幕府

南

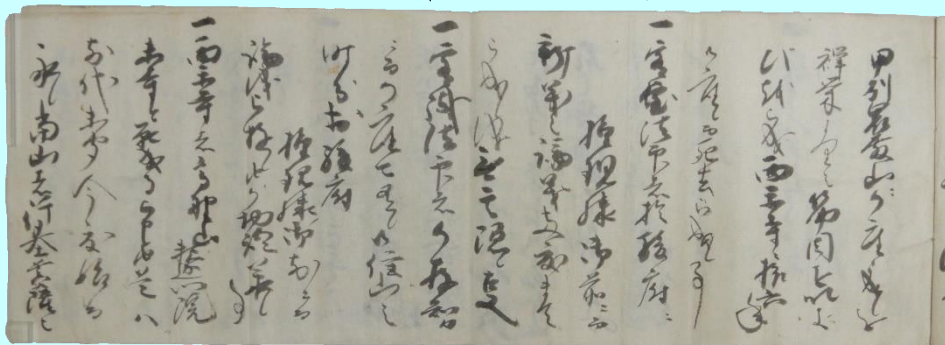
2024 年9月6日

袋井市生涯学習課文化財係 杉山侑暉

西楽寺住職と徳川家康の御前論議

宥宝法印は、駿府で、
新義真言宗の論議を
二回なさった人です。

西楽寺二世住職
宥識法印も、
駿府で御前論議に
出席しました。



年不明4月2日付け〔弘西入道ら連署状〕（西楽寺文書近世989号）

西楽寺と徳川幕府との関係は、いつから始まったのでしょうか。

徳川家康の朱印状もありますが、寺領を保証した朱印状は、ほかの寺社ももらっているものですから、他に、西楽寺と徳川家との関係が分かる史料はないのでしょうか。

調べてみると、近世西楽寺初代住職の宥宝は、徳

川家康の御前論議に二度出席したことがある人だ、という史料がありました。

その史料は、年不明四月二日付け〔弘西入道ら連署状〕（西楽寺文書近世九八九）です。

〔弘西入道ら連署状〕は、江戸時代のはじめ、一六三〇年代に、西楽寺が本末関係や宗派を確定させようとしていた時期に書かれたものようです。

現在、西楽寺は新義真言宗のお寺です。西楽寺文書によると、一六三〇年代よりも前から、西楽寺は新義真言宗の影響が強かったようですが、寛永十五年（一六三八）に、西楽寺は新義真言宗のお寺だと確定し、本末関係も定まりました。

このことは、西楽寺文書に関係文書が多数残されているほか、このときに本山となった醍醐寺の文書『法恩院末寺帳』（『大日本古文書 家わけ第十九 醍醐寺文書之五』九六六号）にも記されています。ここで少しだけ、新義真言宗の歴史について説明します。

新義真言宗は、覚鑿（一〇九五―一一四三）が開いた根来寺から始まります。

中世、根来寺は大きな勢力を持っていたのですが、その大きすぎる力のためか、天正十三年（一五八五）に豊臣秀吉によって攻略されてしまいました。

その後、慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、同年十月に根来寺再興を許可しました。

近世西楽寺十八代住職の栄岳は、慶長五年（一六〇〇）を西楽寺の画期として、それ以降にはじめて住職となった宥宝を西楽寺の初代住職としました（天保十一年（一八四〇）五月付け『住職実名年月取調書』西楽寺文書近世五四ほか）が、それは、おそらく、徳川家康が根来寺再興を許可したことを画期としているのだと思います。

話を根来寺再興に戻しましょう。秀吉の根来寺攻

撃から脱出した専誉と玄宥は、それぞれ長谷寺と智積院を拠点にしていたが、家康の許可を得た彼らによって、江戸時代に、新義真言宗が作られることとなりました。「新義真言宗」という名称は、慶長十八年（一六二三）に徳川家康によって出された「関東新義真言宗法度」によります。

右のような事情により、江戸時代初期には、中世までの根来寺の本末関係は失われていました。そのため、江戸時代初期に、新義真言宗では、本末関係の組織化が進められることとなりました。

寛永年間に、新義真言宗では本末改が行われましたが、この寛永の本末改は関東新義真言宗のみであって、全国には及んでいませんでした。

そうすると、寛永十五年（一六三八）に新義真言宗の寺院として組織化された西楽寺の本末関係決定はかなり早く、関東新義真言宗並みということになります。

それは、この新義真言宗の混乱期に、西楽寺を古義真言宗寺院にしようとする人たちが現れ、訴訟となったことで、全国的にも早い時期の組織化が行われたことによります。

先ほど紹介した「弘西入道ら連署状」は、寛永年間に、西楽寺が新義真言宗寺院となるか、古義真言宗寺院となるか、という訴訟が起こった際に、お寺の歴史を調べる中で作成されたものです。

そこには、「有寶法印者於_二駿府_一」権現様御前_二而新義之論議両度まで被_レ成候儀、無_二其隱_一候事」（有寶法印は駿府で権現様の御前で新義の論議を二回務めた人で、その隠れはありません）とあり、その横

には、西楽寺二代住職の有識も、駿府の権現様（徳川家康）の御前で論議をしました、とあります。

また、この訴訟の中で書かれた、寛永十四年（一六三七）のものと思われる、七月十八日付け「菩提樹院心応書状」（西楽寺文書近世九九二）にも「刺西楽寺有宝八日誓僧正駿府御前論議_二而一段決尺出来候而、権現様御感御定之由及_レ承候_一」とあり、難しいところもありますが、「有宝は、駿府の御前論議で権現様（家康）を感心させた人物です」とのことです。

宇高良哲氏によると、「家康の御前論議は一種の人物テストの性格をもっていた」（宇高著書「二六五頁」）とのことですから、有宝は、御前論議でその学識や人格を認められたようです。

徳川家康の御前論議については、誰が参加したのかは不明ながら、山形県長井市の遍照寺文書に出席者の席次図があり、実際に西楽寺の僧侶が論議に参加していたことが分かりました（宇高著書「二六一頁」）。

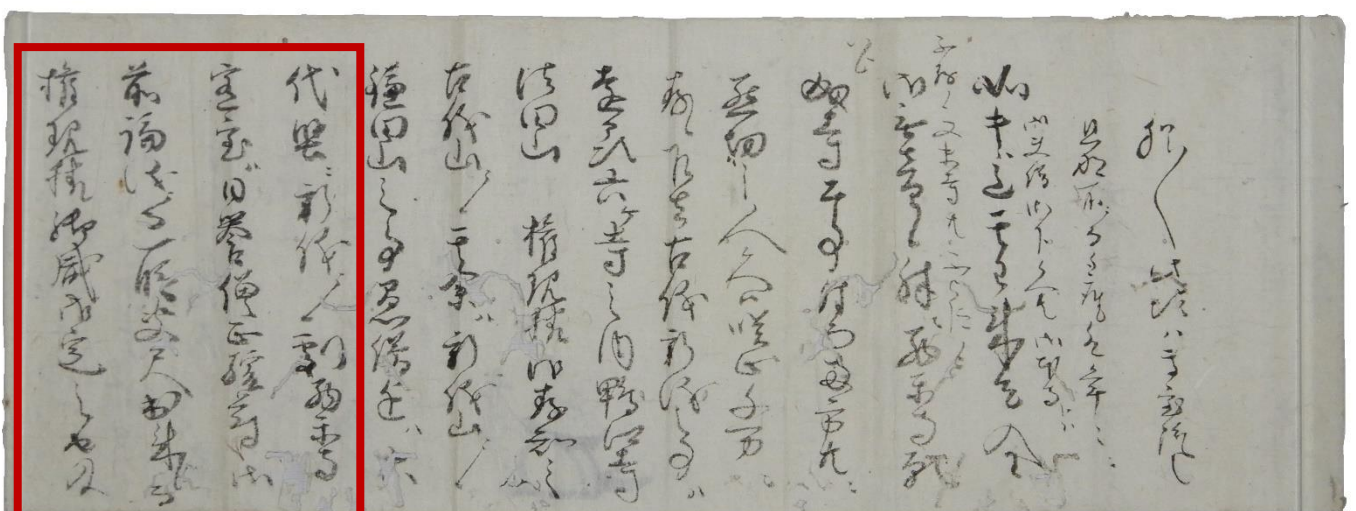
西楽寺の僧侶が、御前論議で徳川家康に認められたというエピソードは、どうやらかなり信憑性が高いそうです。

【参考文献】

① 榎田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、一九六四年）。

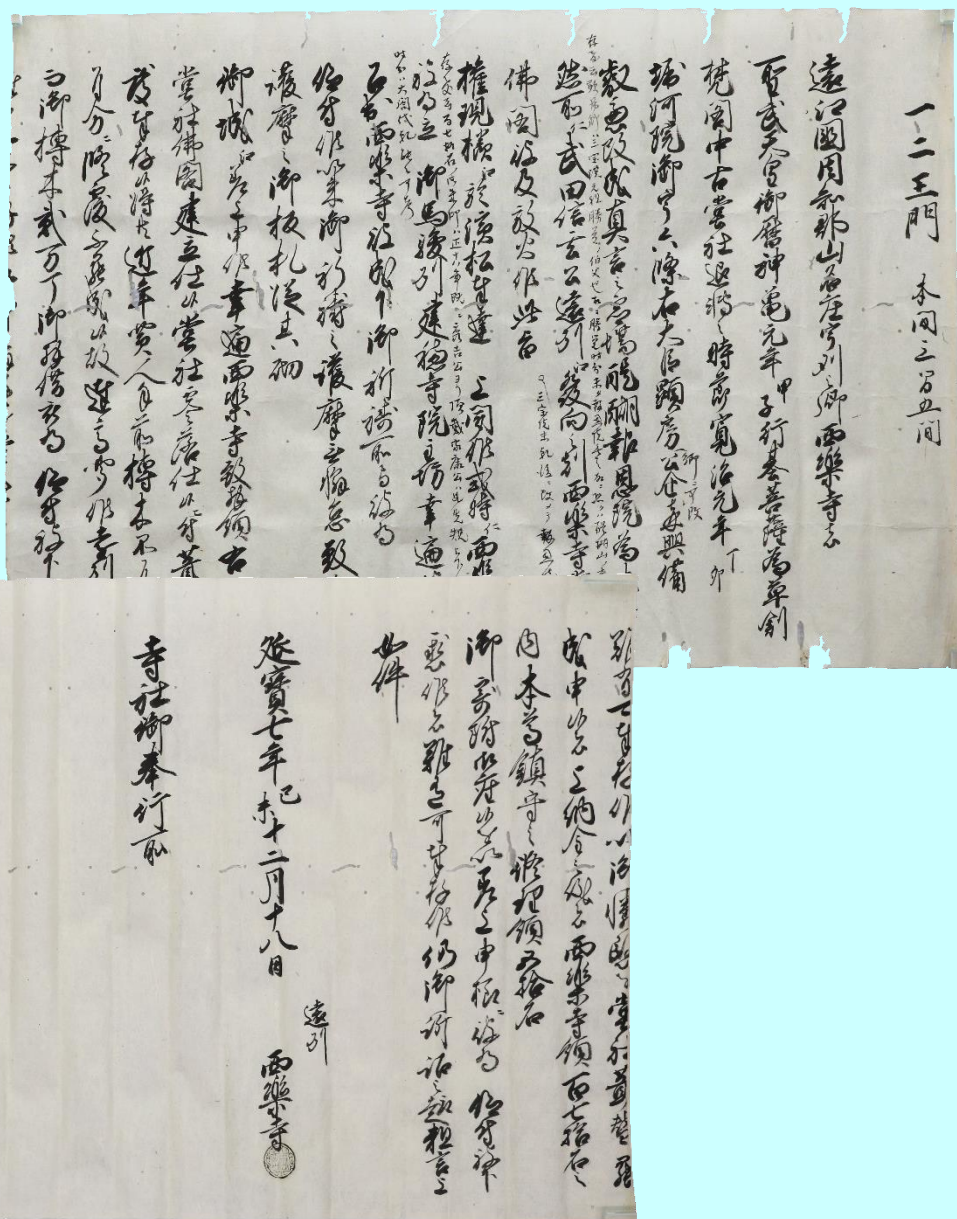
② 宇高良哲「近世初期の新義真言宗教団」（『近世関東仏教団史の研究——浄土宗・真言宗・天台宗を中心に——』文化書院、一九九九年、初出一九七五年）。

③ 中川委紀子『根来寺を解く 密教文化伝承の実像』（朝日新聞出版、朝日選書、二〇一四年）。



7月18日付け「菩提樹院心応書状」（西楽寺文書近世992） 囲みの中で有宝の話題が出ている。

寺社縁起は幕府に提出する書類だった



延宝7年（1679）12月18日「遠州西楽寺堂社之覚」（西楽寺文書近世8）

西楽寺では、江戸時代に多くの縁起が書かれました。縁起は、寺社の由緒を記したものです。

西楽寺文書には、数え方にもよりますが、二十以上の縁起があり、大きく五系統ほどに分類できます。それぞれに内容が少しずつ異なります。

西楽寺縁起としては、袋井市史編纂委員会編『袋井市史 史料編一 古代中世』（袋井市役所、一九八一年）に収録されている「勸進記」（弘治三年＝一五五七年作成）と「西楽寺記」（延宝八年＝一六八〇年作成）が知られています。

ですが、実は、この二つの縁起は、西楽寺に数多く残された縁起の中では少数派で、最も多くの縁起が残っている系統は、「堂社之覚」と題された縁起の系統です。

「堂社之覚」系統の縁起は、幕府に提出した書類の一部です。

江戸時代に寺社縁起が作られる契機として、最も多いのは、寺社の修復に際して寺社奉行（幕府）に提出する添付書類として作成した、というものです。

つまり、「お堂などを修復したいので、修復の許可をください」とか、「できれば補助などをしていただけると……」といった書類に、「うちはこんな由緒があつて重要なお寺なんです」と説明するための添付資料が、江戸時代の寺社縁起でした。

寺社修理に際して提出する書類で大事なことは、①徳川家との関係、②歴史的な縁起と霊宝および古

文書類を持った寺であること、でした。

江戸時代の寺社縁起は、徳川家との関係や、例えば天皇家などの権威と自分たちの寺社を結びつけるように作って提出することが求められた公文書なので、そういうものと思つて読まないといけません。

「勸進記」は、戦国時代にお寺が火災で焼けた際に寄進を募った文章で、「西楽寺記」は、詳細不明ですが、おそらくは住職の個人的な人間関係から、西楽寺六世住職有仙の業績を称えるために書かれたものです。

「堂社之覚」を読んでもみると、お寺の歴史が記された後、末尾に、以下のように書かれています。

（前略）雖^レ然、至^ニ近頃^一堂社零落仕候^ニ付、葺替仕度奉^レ存候得共、近年買入手前榑木不自由^ニ而、自分^ニ修覆不^ニ罷成^一候故、達^ニ高聞^一候。遠州舟明^ニ而御榑木式万丁御拝借被^レ為^ニ仰付^一被^レ下置^一候者、難^レ有可^レ奉^レ存候。以^ニ御憐愍^一を一堂社葺替罷成申候者、上納金之儀者、西楽寺領百七拾石之内、本尊鎮守之修理領五拾石御寄附御座候を以差上申様^ニ被^レ為^ニ仰付^一被^ニ下置^一候者難^レ有可^レ奉^レ存候。仍御訴訟之趣粗言上如^レ件。

「現代語訳」

しかし、近頃に至り、堂社は零落し、屋根を葺き替えたいと思つても、近年は買うのにも苦勞し、榑木（材木／板葺きの屋根の材料）が不自由しています。

自力で修復することができない、ということが高聞に達し、遠州船明で、榑木二万丁を拝借できるよう、仰せ付けていただいたことは、ありがたく思っています。

御憐愍を以て、堂社の葺き替えが成つたら、その上納金は、西楽寺領（朱印地）一七〇石の内、本尊鎮守の修理領（その土地の収益を本尊・鎮守の修理費用に充てる、としている領知のこと）として五〇石寄附している土地があるはずだから、そこから払えば良い、と仰せ付けてくださったことは、ありがたい限りです。

よつて、以上のように御訴訟（江戸時代の言葉では、「訴訟」は、「嘆願」とか「お願い」といった意味）の趣を粗々申し上げました。

本堂修理にあたって、屋根のこけら葺きの費用が大変で……という、現代にも繋がる悲鳴が聞こえてきて、私も読んでいて心が痛くなってきました。

西楽寺縁起には、どの系統を読んでもほぼ必ず登場する、四つの話題があります。

- ① 西楽寺は神龜元年（七二四）に行基が草創。
- ② 寛治元年に源頭房が再興（この時に醍醐報恩院の末になった、と書くものと、単に、醍醐の末寺になった、とのみ書くものがある）。
- ③ 武田信玄によつて放火された。
- ④ 武田信玄によつて焼かれたことを知った徳川家康が助けてくれた（「西楽寺記」のみ豊臣秀吉が助けたことになっている）。
- ④ は、江戸時代の縁起では必ず書かないといけな

い内容です。③は、家康が助けてくれたことを劇的に演出するための部分で、恐らく創作です。

注目したいのは②源頭房による再興です。

源頭房は、村上源氏と呼ばれる、摂関家と密接な関係を持つ一族の人です。

頭房による再興と、そのときに醍醐寺の末寺になった、という内容は、江戸時代の縁起に求められた要素ではありません。また、戦国時代にできた「勸進記」にもこのことは書かれています。

ということは、源頭房の部分は、江戸幕府と関わらず、昔から伝えられてきた部分と言えます。

ここで、村上源氏という点が重要です。村上源氏、特に頭房の兄の俊房は、醍醐寺と深い関係を持ち、笠原牧など、袋井周辺に領地を持っていました。

そして、この部分の記述は、奈良時代以来の寺院が、平安時代における制度の変化によって弱体化し、それが院政期に再開された、という記事として、短いながらも、リアリティを持っています。

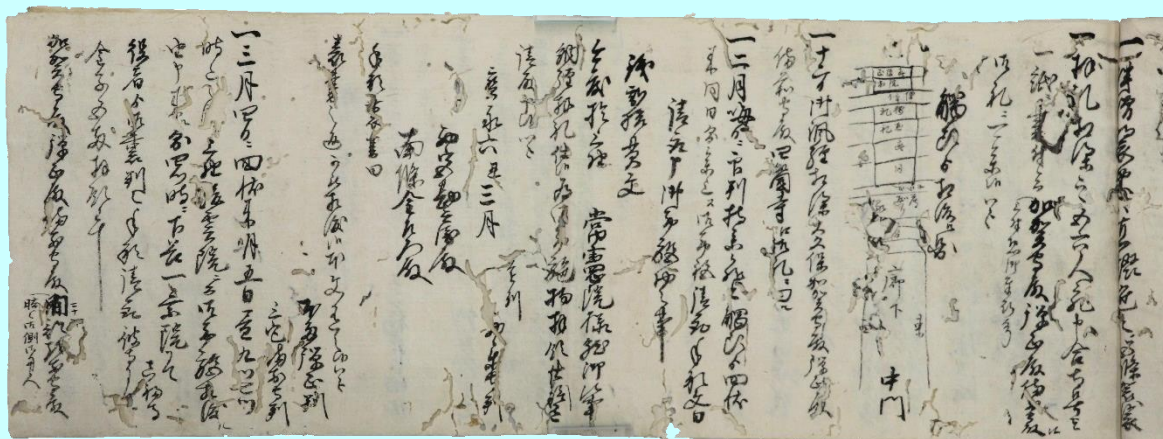
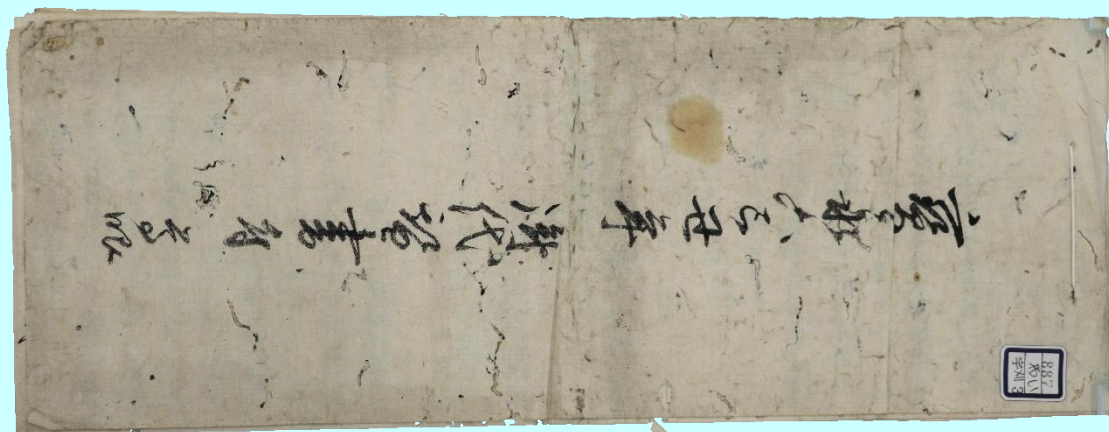
つまり、②の記事を、「江戸時代の寺社縁起」という史料の性格を踏まえて読むと、①の奈良時代の草創という部分にも現実味が出てくるのです。

今後古代西楽寺の調査が進むことが期待されます。

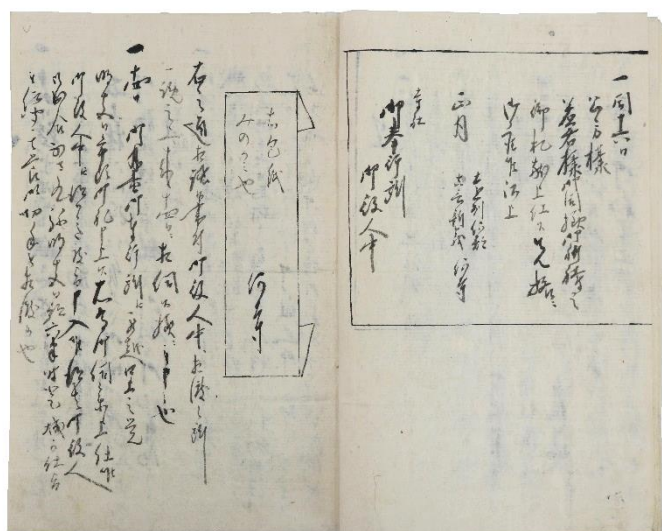
【参考文献】

- ① 桜井徳太郎「縁起の類型と展開」（桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登校注『寺社縁起』日本思想体系20、岩波書店、一九七五年）。
- ② 平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』（吉川弘文館、一九八八年）。

西楽寺住職、徳川將軍の葬儀に出席



宝永6年(1709)付け『御代替書付』(西楽寺文書近世887)



『年頭御礼勤番留記』(西楽寺文書近世1380)

年頭の挨拶に関する細かなことが書かれている。

江戸時代、西楽寺は、五年に一回、正月に参府(江戸に行くこと)して、江戸城で年頭の挨拶に参加していました。

このような江戸城内での儀礼を、学術用語で「殿中儀礼」などと呼びますが、西楽寺文書では、「登城御礼」と書かれています。

江戸城での儀礼は、寺社の格が反映されたもので、「内独礼」(本山が出席)→「惣独礼」→「惣礼」(朱印地五十石以上)→「惣礼」(朱印地五十石以下)の順で、挨拶も格式が序列化されています。

あと、何年に一度挨拶に行くか、ということも序

列が決まっています、大変細かいのですが、西楽寺文書を調べてみると、西楽寺は、一般的な基準どおり、朱印地五十石以上のお寺の格式で登城御礼に出席していました（西楽寺の朱印地は一七〇石）。

こうした幕府の様々な儀礼は、四代家綱期以降進められ、八代吉宗の頃までに完成したと言えます。

西楽寺には、定期的に行われていた年頭御礼だけでなく、将軍が代替わりした時の儀礼（代替御礼）に関わる史料も残されています。

将軍の代替わり儀礼には、①前將軍の葬送、②御代替御礼、③將軍宣下という三つの要素があります。が、お寺が関わるのは、①前將軍の葬送です。

西楽寺文書には、五代綱吉の葬儀（宝永六年（一七〇九）付け『御代替書付』西楽寺文書近世八八七）、六代家宣、七代家継の葬儀（有章院様御他界）西楽寺文書近世一六五八、『御諷經并御繼目御礼留帳』西楽寺文書近世一七五五）に関わる史料があります。

いずれも、西楽寺八世住職尊昭が記したもので、少なくとも尊昭は、將軍の葬儀に参列することができた人物だったようです。

中でも珍しい史料が、五代將軍綱吉の葬儀を記す『御代替書付』（西楽寺文書近世八八七）です。

江戸幕府の儀礼が整備され出したのは、四代家綱期からですから、綱吉のころの幕府の儀礼は、かなり初期のものです。

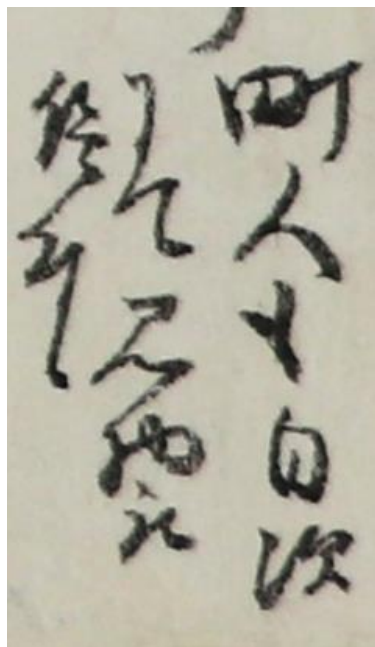
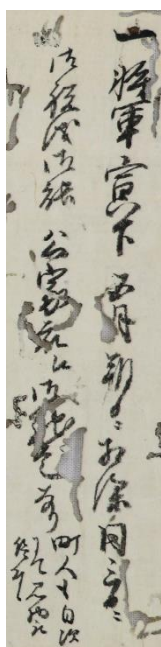
また、そもそも、綱吉・家宣・家継の葬儀に関わる史料が地方の寺院に残っている例もかなり少ないように思います。現存している中では、かなり古い

將軍の葬儀に関する史料なのではないでしょうか。

『御代替書付』を読んでもみると、新義真言宗組織のとりまとめを担当していた触頭からもらった席次図の写し（左写真・図）や、装束や人の動きなどが詳しく載っています。



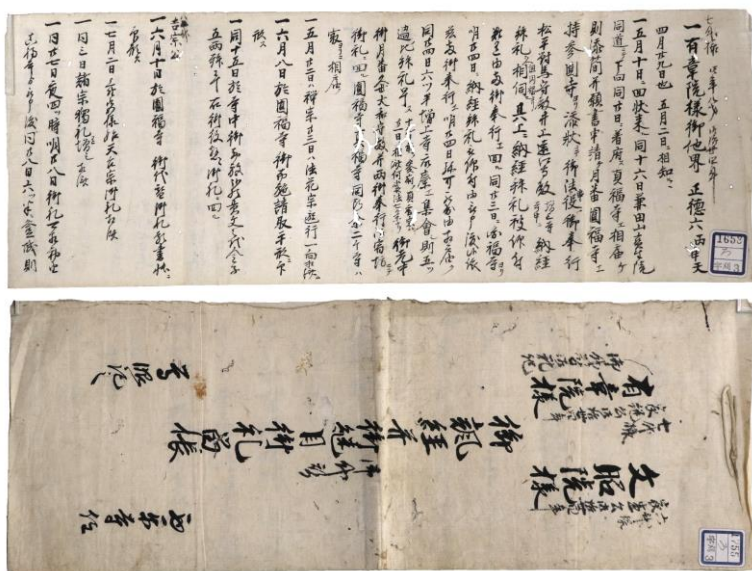
また、「將軍宣下五月朔日ニ相濟。同三日ニ御祝儀御能。公家衆江御馳走なり。町人も白須にて見物被二



仰付一候」とあり、五月一日に將軍宣下をした後、三日に「祝儀で公家衆にごちそうをしたことや、町人にも見物が許されたことが記されています（上写真）。

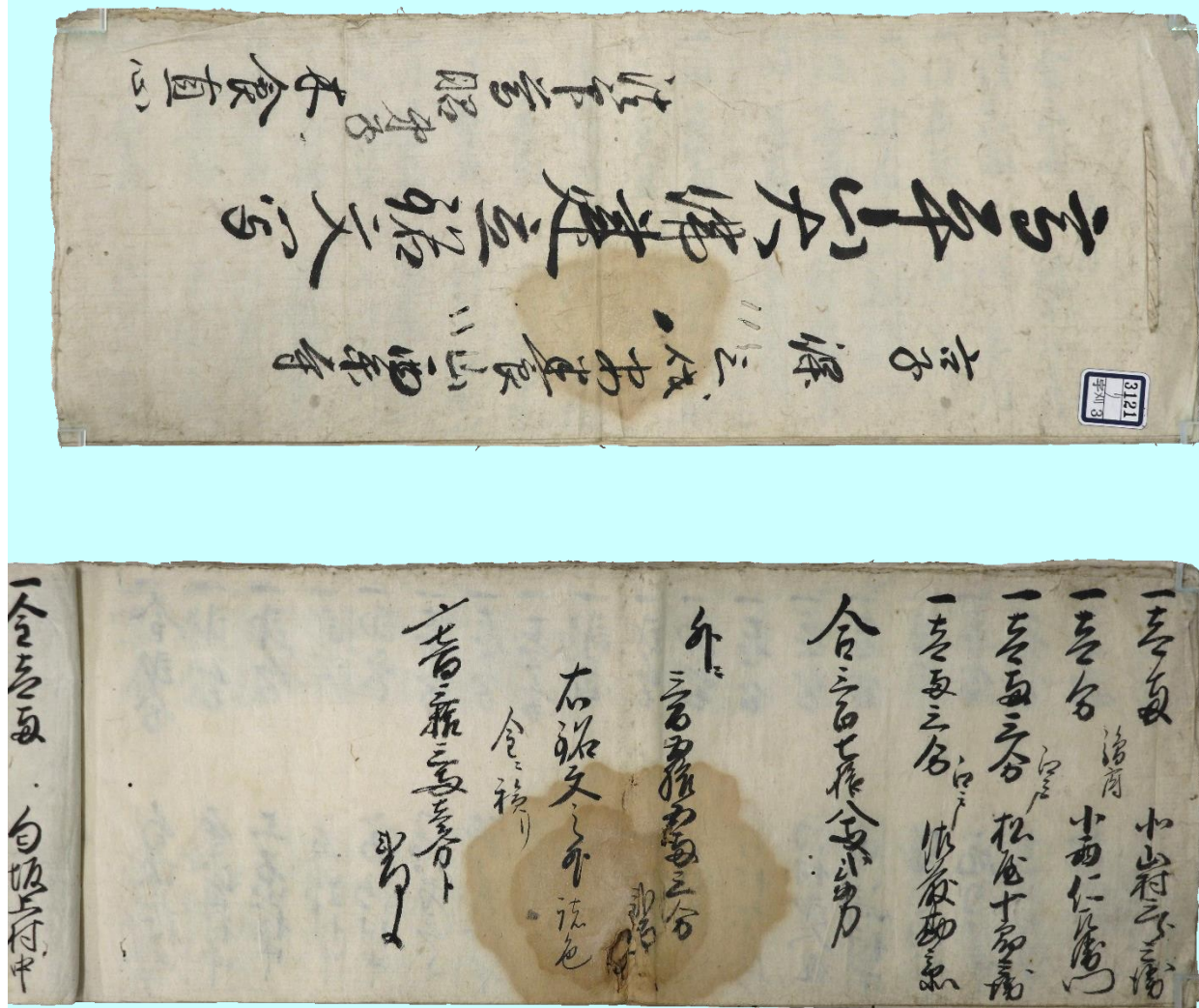
【参考文献】

- ①西沢淳男「寺社の將軍代替御礼と殿中儀礼——高尾山薬王院を事例として——」（『日本歴史』五八八、一九九七年）。
- ②岩橋清美「將軍代替り儀礼の社会的意義——第13代將軍徳川家定の代替り儀礼を事例として——」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第8号、二〇〇二年）。
- ③高嶋弘志「蝦夷三か寺の殿中儀礼と寺格について」（『釧路公立大学地域研究』18、二〇〇九年）。



〔有章院様御他界〕（上）と『御諷經并御繼目御礼留帳』（下）

徳川將軍の葬儀が、高平山大仏に影響を与えた？



享保3年（1718）付け『高平山大仏建立銘文写』（西楽寺文書近世 3121）

西楽寺八世住職尊昭は、同郷の弟子である木食直心とともに、寄付を募り、西楽寺の末寺であった高平山遍照寺（現森町）に大仏を建立しました。

当時の史料に出てくる名称から、以下この大仏を「高平山大仏」と呼びます。

大仏建立は享保三年（一七一八）に成りましたが、尊昭が、宝永六年（一七〇九）の五代將軍綱吉葬儀、正徳二年（一七一二）の六代將軍徳川家宣に参列していることをあわせて考えると、大仏建立の時期が、重要な意味を持っているのではないか、と思えます。

高平山大仏の建立には、宝永四年十月四日（太陽暦一七〇七年十月二十八日）の宝永地震が影響していると思いますが、それ以外にも、高平山大仏建立に影響を与えたと見られる歴史的イベントがあります。

元禄～宝永の東大寺大仏復興です。

永禄十年（一五六七）に兵火によって消失した東大寺大仏と大仏殿は、東大寺の公慶とその後継者たちの尽力により、元禄五年（二六九二）に大仏再興、宝永六年（一七〇九）に大仏殿再興が成りました。

なお、中門や廻廊が完成するには、この後まだ三十年ほどを要したとのこと。

東大寺大仏再建事業は、高平山大仏建立事業と、かなり近い時期に行われています。

東大寺大仏については、元禄十四年（一七〇一）に、全国的に、年貢のように資金（奉加金）を集め

る仕組みになりました。

西山厚氏は、この全国的な奉加金について、金額がわずかであること、この全国的な集金の後に、大仏の参詣者が増加したことを指摘して、この集金が、大仏の知名度を上げたことを示唆しています。

また、平岡昇修氏は、ツーリズム、地域振興の視点で、江戸時代の東大寺大仏復興を分析しています。

東大寺大仏再建事業は、江戸などでも活動を展開していました。

尊昭が江戸に行く機会は、葬儀以前からあったは

ずで、全国的な奉加金でもいづらか情報を知っていたことと思いますが、江戸に行ったときに、より詳しく東大寺大仏再建事業に触れることがあったと思います。

東大寺大仏殿再建には、新義真言宗の知足院（隆光が、というべきでしょうか）も関わっています。

その縁で西楽寺に様々な話が伝わっていてもおかしくはないと思います。

そして何より、尊昭が参列した將軍の葬儀は、全国から主だった寺院の関係者がやってきます。そこで、様々な情報

がやりとりされて

いたことは想像

に難くありません。

家宣葬儀のとき

には、まだ東大寺全体の再建

は終了しておらず、大仏、大仏殿

のひとつの完成を見た時点

で、未だ継続中の寄付、再建活

動について情報を得る機会とな

ったと思います。

先に、一七〇

〇年前後には、

一種の大仏ブームが起こっていた、とする先行研究を紹介しました。

この時に起こった一種の大仏ブームの潮流が、尊昭にひらめきをもたらした可能性は高いと思います。

とすれば、高平山大仏の建立のアイディアは、江戸を重要な交流の場として、東大寺大仏再建事業を参考に練られたもの、と考えて良いのではないのでしょうか。

そして、將軍の葬儀などの殿中儀礼の場こそが、数多くの寺院が情報交換できる場だったのでない

でしょうか。

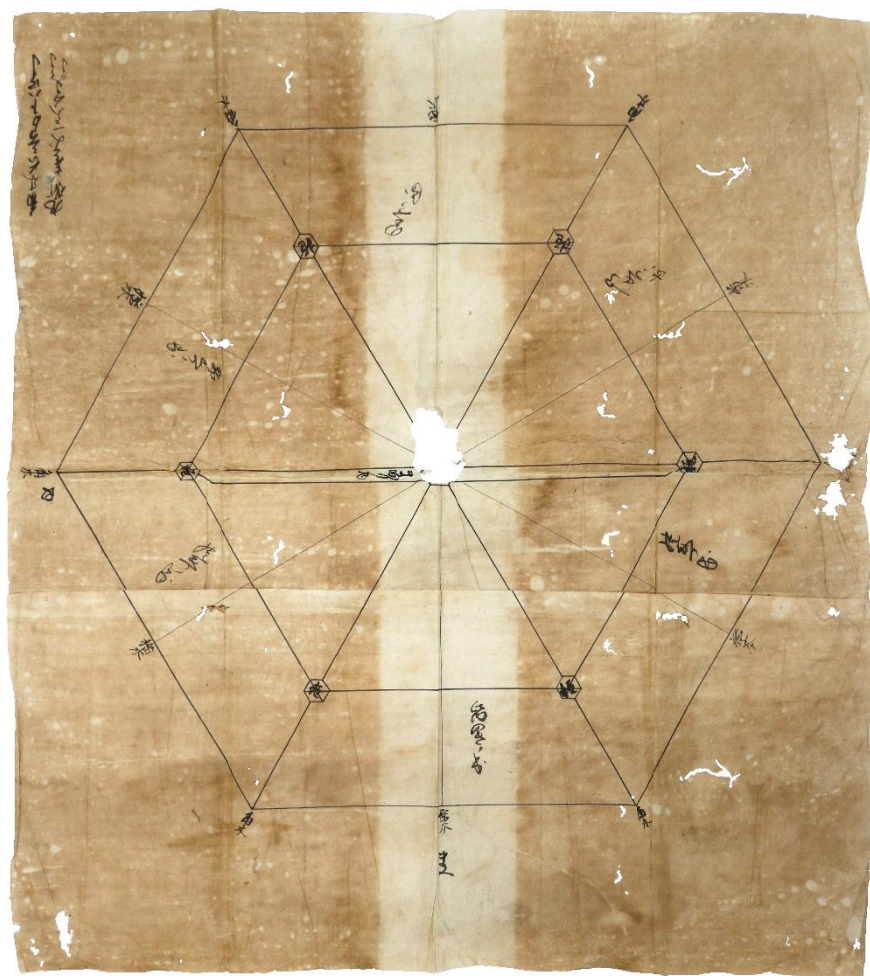
【参考文献】

①平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』（吉川弘文館、一九八八年）。

②西山厚「公慶上人の生涯」（GBS実行委員会編『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第四号 論集 近世の奈良・東大寺』東大寺発行／法蔵館制作・発売、二〇〇六年）。

③平岡昇修「奈良の復興は大仏再建から——江戸中期の奈良に脈をいもたらした「勸進」と「寄進」——」（『EURO-ASIA』5、二〇一六年）。

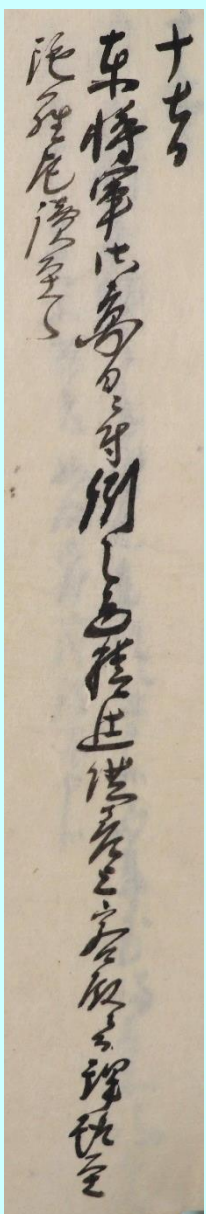
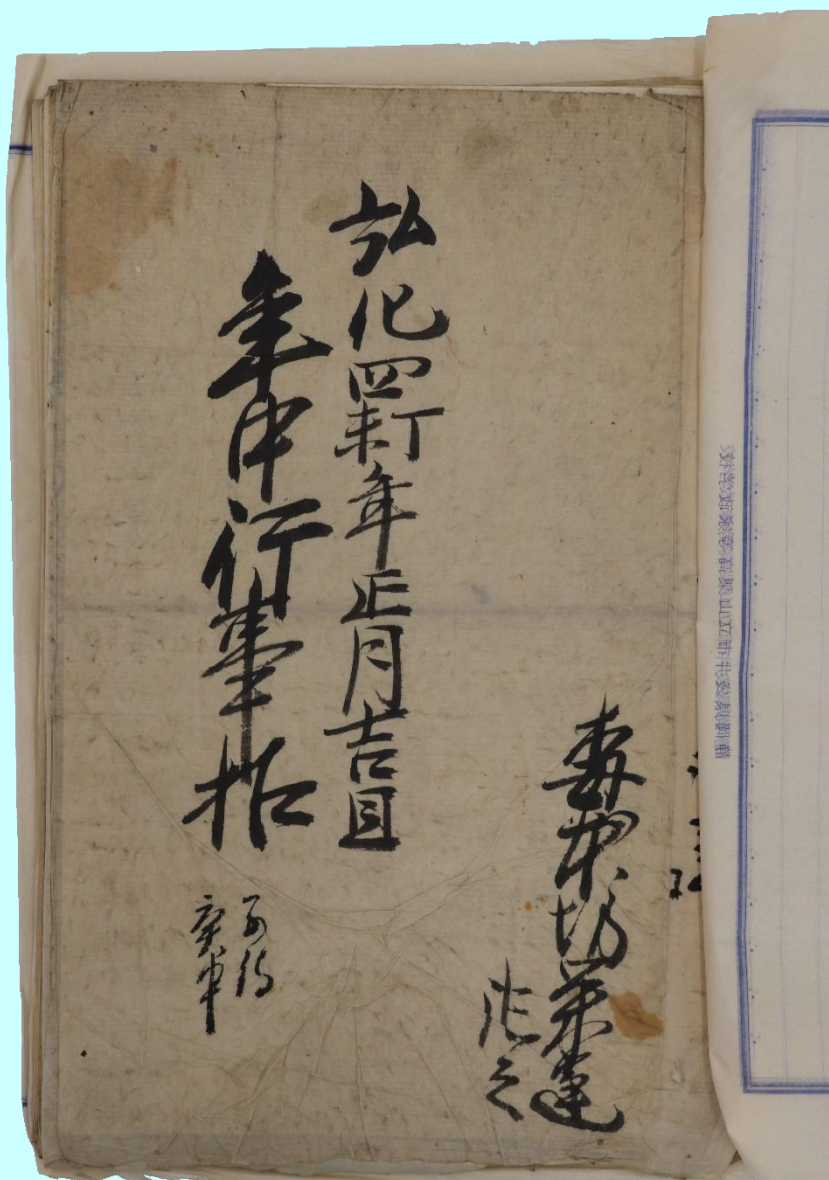
NARASIA Q』5、二〇一六年）。



〔高平六角堂図〕（西楽寺文書近世 3187）

高平山大仏殿は六角堂だった。

西楽寺と東照宮



弘化四年（一八四七）正月『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六）

左は四月十七日条の東照宮法要。

最後に、神になった徳川家康、すなわち、「東照宮」と西楽寺についてご紹介したいと思います。

神とお寺、というと、不審に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、江戸時代以前は、神仏習合の世の中でしたから、お寺に神様がいても何も問題はありません。

それはさておき、江戸時代には権力者が神格化します。様々な武士、戦国大名が神様になりました。

その代表が徳川家康＝東照宮です。

武士の神格化は、世俗権力が宗教的権力も持とうとした動き、と説明されることもあります。豊臣秀吉や徳川家康の神格化は、世俗政治権力と宗教的権力の力が複雑に絡み合い、新たな秩序をつくり出そうとした、とも言えるでしょうか。……ちよつと難しいお話になるので、今回は割愛します。

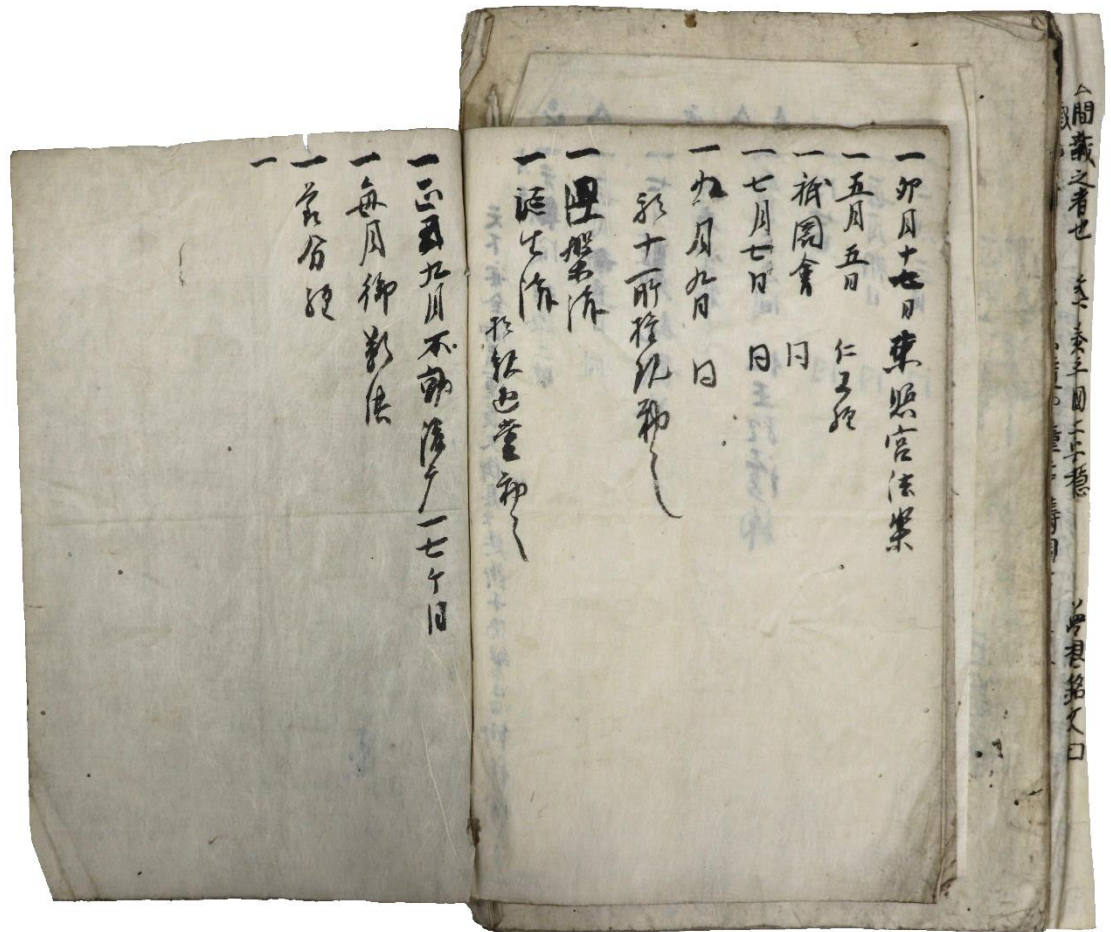
神になった武士の中で、その勧請数を比べると、徳川家康（東照宮）が圧倒的一位です。武士だけでなく、民衆からも人気がありました。

家康が立ち寄った、という伝説を伴う例も多く、東照宮を遊行神と見る向きもあります。

実は、徳川幕府は、三回も全国の東照宮の調査を行っているのですが、それにもかかわらず、幕府は全国の東照宮を把握できなかったそうです。

それだけ東照宮は人気でした。

さて、西楽寺の東照宮ですが、東照宮儀礼を行っている記録がありますので、存在していたことは確



『当山諸由緒扣』（西楽寺文書近世 11）に収録されている尊昭のノート

右端に「一、卯月十七日、東照宮法要」と書かれている。

職尊昭が書いたノートです（『当山諸由緒扣』西楽寺文書近世一一）。

そこには、「一、卯月十七日東照宮法要」とあります。

家康の命日である四月十七日に東照宮の法要を行っていたようです。

尊昭のころにどの

のような東照宮法要を行っていたか、細かなことは分からないのですが、

弘化四年（一八四七）正月に作成された『年中行事扣』

（西楽寺文書近世一六八六）四月十七日条に、その次第が書かれていました。

東照宮御祭祀、鎮守殿におみて祭り。神酒式陶精進供。三菜^ニ而外し赤飯^ニ三盛上^ニ候也。幕ハ木綿あを也。紋付之幕張幟式下り立、勤ハ理趣経心

〔×陀羅尼〕
経等也。簾等掛之出仕。昼赤飯三升。

鎮守（十所権現）でお祭りをする、このことです。御神酒を二据えと精進供（お供え物）をお供えする。三菜と赤飯をお供えして、木綿の青い幕を張り、理趣経を読誦する、このことです。

【参考文献】

- ① 曾根原理「徳川王権論と神格化問題」『歴史評論』六二九、二〇〇二年。
- ② 中野光治「諸国東照宮の歴史的考察」『史観』一五二、早稲田大学史学会、二〇〇五年。
- ③ 野村玄「徳川家光の国家構想と日光東照宮」『日本史研究』五一〇、二〇〇五年。
- ④ 野村玄「東照宮号宣下をめぐる政治過程再考」『史海』五五、二〇〇八年。
- ⑤ 高藤晴俊「全国の東照宮奉齋の諸相」『神道宗教』二四八、二〇一七年。
- ⑥ 中野光治「諸大名による東照宮勧請の歴史的考察」『神道宗教』二四八、二〇一七年。
- ⑦ 野村玄「徳川家康の神格化 新たな遺言の発見」(平凡社、二〇一九年)。
- ⑧ 高野信治「武士神格化の研究 資料編」(吉川弘文館、二〇一八年)。
- ⑨ 高野信治『神になった武士 平将門から西郷隆盛まで』(吉川弘文館、歴史文化ライブラリー五四六、二〇二三年)。

かです。

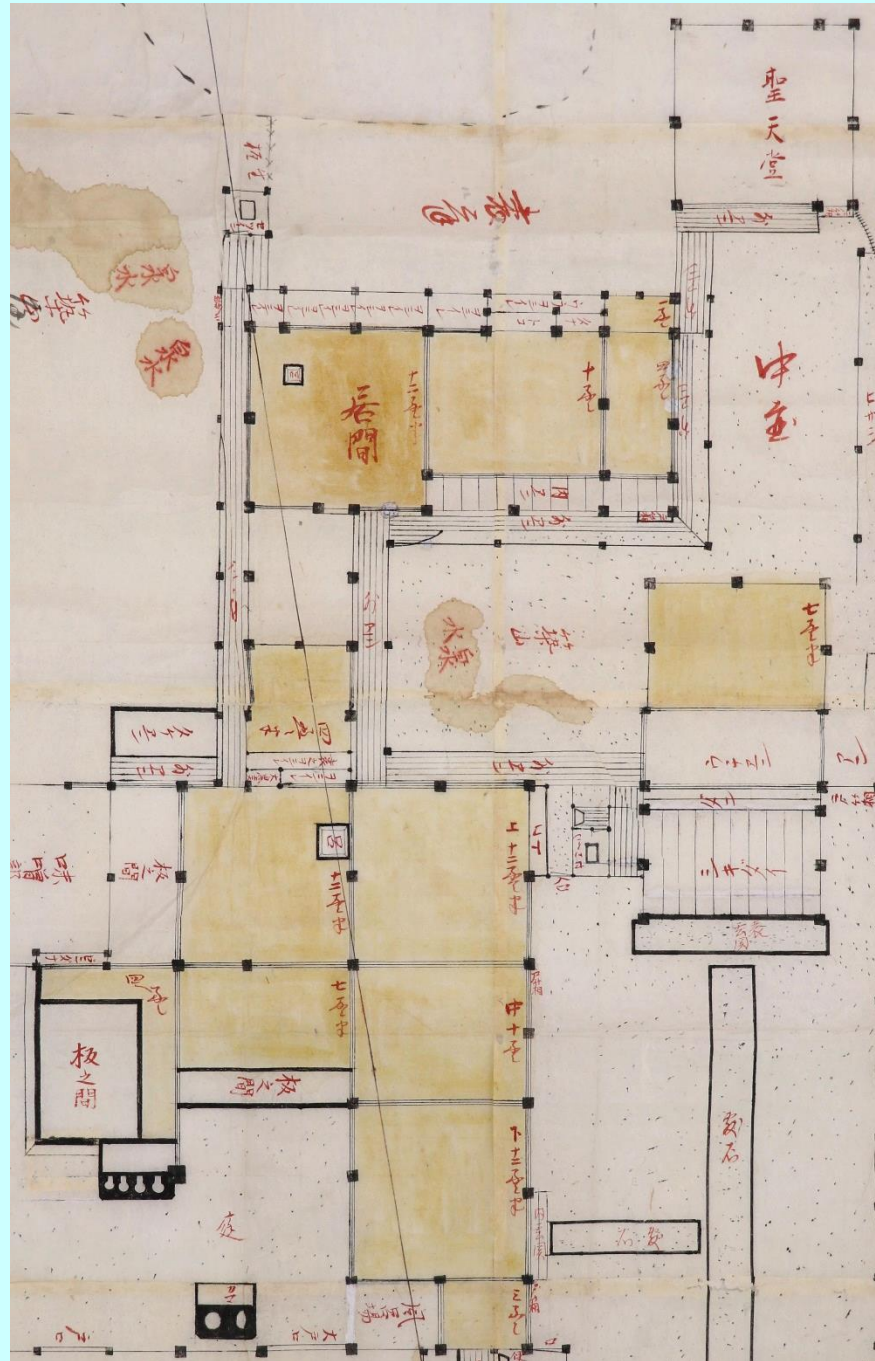
調べてみると、幕府や、その後の東照宮関係者もその存在をよく把握できていなかったのです、おそらくは私勧請のものが存在したのだと思います。

西楽寺東照宮の古い例は、一七〇〇年頃に八世住

十七日

東照宮御祭祀、鎮守殿におみて祭り。神酒式陶精進供。三菜^ニ而外し赤飯^ニ三盛上^ニ候也。幕ハ木綿あを也。紋付之幕張幟式下り立、勤ハ理趣経心

西楽寺の東照宮はどこにあったのか



「先般有様之図」(西楽寺文書近世 3764-3) 部分、北が上

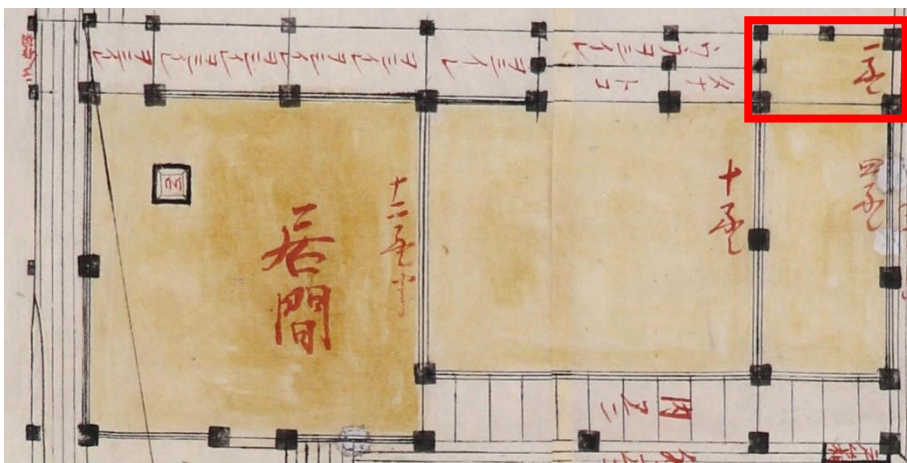
下の「板之間」などがある建物が客殿、右上が「聖天堂」。

西楽寺の東照宮はどこにいたのでしょうか。

弘化二年(一八四七)十二月『正月御備莊取扣帳』
(西楽寺文書近世一六八四) という、様々なお祈り
している神様へのお供え一覧を見ると、(前略)客殿
道場荘↓歓喜天↓裏道場↓寺中本尊(後略)の順に
書かれていて、この内、「裏道場」に「一、台五合 東

照宮」とありました。

こうしたリストの配置は、一般的に、地図上で近
い順に書いていきますから、客殿と歓喜天(聖天)
の間にある建物でしょうか。
安政東海地震の後に書かれた、安政江戸地震直前
の学頭坊の図面「先般有様之図」(西楽寺文書近世三



〔先般有様之図〕をさらに拡大。囲みのあたりが怪しいか？

七六四―三)を見てみると、「居間」と書か
れた部屋の右に二つ行った部屋の北に、不
思議な区画があります(左拡大図囲み)。
とすると、東照宮がいたのはこのあたり
でしょうか？
残念ながら、現時点の情報では、まだは
つきりしたことは分かりません。